

蛇—日本の蛇信仰

古代の日本では、蛇が信仰の対象だったことを在野の民俗学者「吉野裕子氏の著書（蛇—日本の蛇信仰）」から引用させていただきました。

蛇と言えばほとんどの人が嫌悪感と恐怖心、ある種の畏敬の念などを持たれていますが、日本民族が縄文時代から蛇を信仰していたことは事実のようです。古代においては蛇は絶対の信仰の対象でしたが、時代が下るにつれて人々の認識も変わり日本民族の蛇信仰の中に、畏敬とは別に強度の嫌悪が含まれてくるようになりました。

畏敬と嫌悪の二つの要素のため蛇信仰は次第に象徴の中へ埋没して行くようになりましたが、その象徴は今も私たちの周りに存在し、その由来を知らぬまま信仰の対象になり、生活習慣の中にいきつづけているようです。

* 古代に蛇は何故信仰の対象になったのか。

- 1 蛇の形態が男性の象徴を思はせ、縄文人の露わで激しい性に対する憧れ、崇拜、畏怖、歡喜が凝縮されて象徴になっていること。
- 2 毒蛇、蝮などの強烈な生命力と、その毒で相手を一撃の下に倒す。これらのことが相乗効果を持って、蛇を祖先神にまで高めていったものと思はれます。

* 日本原始の祭りの形は神蛇とそれを祀る女性蛇巫（へびふ）を中心に展開されました。女性蛇巫の役割とは。

- 1 女性蛇巫が神蛇と交わること。
- 2 神蛇を生むこと。
- 3 蛇を捕らえて飼育し祀る。

1 は実現不可能なので、円錐形の山の神、蛇の神体に似た樹木、石柱などの代用物で交合のもどきをすることが考えられ、2、3 は実際に蛇を捕らえてくることで実現し厳守されたようです。

写真01 土偶

頭上にまむしを乗せた土偶（縄文中期）

弥生時代になると稲作の発達につれて、その収穫を阻害する野鼠の天敵として田の神の蛇信仰と、それまでに引き継いだ縄文の蛇信仰が混合し、複雑化していきました。

弥生人にとって男性の象徴を思はせる蛇の形態は男性の象徴—種神—蛇—稲の実りとして、又蛇が成長するにつれて目や鼻まですっぽりと脱皮するさまは、それなくしては生きていけないためにそこに新生と永世を見てとり、縄文人に勝るとも劣らない信仰の対象になっていったようです。



時代が下るにつれ日本神話の中で描かれている蛇は、嫌悪の要素が強くなってきて、蛇に象徴されるものやもどきが登場していきました。そしてとぐろを巻く蛇を連想させる姿から円錐形の山や家屋（竪穴式住居）などが信仰の対象になっていきました。



写真02 竪穴住居
縄文時代の竪穴住居



縄文家屋の図

写真03 三輪山



大和の大神神社（オオミワジンジャ）のご神体三輪山秀麗な円錐形の山は人の心に一種の敬虔な信仰を呼びさします。

蛇信仰に覆われていた古代日本人の目には祖先神の蛇がずっしりと大地に腰を据えてとぐろを巻いている姿として映ったのではないかとされています。

大神神社の祭神の大物主神（オオモノヌシノカミ）は蛇でその妻は、山麓にある日本最古の古墳、箸墓古墳（ハシハカコフン）の主ヤマトトヒモモソ姫とされています。



写真04 箸墓古墳
箸墓古墳



写真05 箸墓古墳
上空より見た箸墓古墳

大神神社と箸墓古墳の関係は神蛇と女性蛇巫の交わりを裏付ける伝承として、神と巫女の神婚説話の代表になっています。吉野氏は前方公円の古墳の形そのものが蛇を象徴しているのではと問いかけています。三輪山と箸墓は切り離すことのできない、日本原初蛇信仰の証（あか）しではないかとのことでした。



写真06 佐太神社

佐太神社
本殿(国重文)は三殿並立という珍しいもの。
三殿とも大社造です。

日本各地には蛇が祭神の神社が相当あり、出雲の佐太神社（出雲大社と並ぶ由緒ある神社）の大祭の神事には必ず海神の竜蛇が出雲のいづこかの浦にあがるという言い伝えがあり、現在（この本の書かれた昭和53年）でもこの祭りの際には生身の海蛇が奉納されるようで、祭神の佐太大神と蛇の関係が推測されます。



写真07 諏訪大社

雪の諏訪大社上社本宮拝殿
諏訪神社では元旦の祭事として、土を掘り起こして冬眠中の蛙を取り出し、それをその年最初のお供え物として、諏訪の神に供えるということをしています。これは諏訪の神に蛇の性質を見ていることができそうです。

又蛇のトグロを連想させる円錐形家屋として、竪穴住居に似た土室を祭事に用いた『土室神事』（ハムロシンジ）は、ご神体の蛇を土室の中にこもらせる神事で、実際にこの行事は十二世紀まで諏訪大社に伝承されていたとされています。



写真08

大元神

写真09





写真10 大元神の神事

大元神神社だけでなく島根県邑智郡（オオチグン）一帯では大元信仰により、わら製の蛇が信仰の表徴とされ、この藁蛇は「託綱（たかつな）」といわれ、神懸かりがあったとき、大元神が憑いた人がこの綱に手をかけて託宣を行っていました。託宣とは神職が来年の作柄や災難の有無などを聞き出すことだそうです。

日本の神話の中に活躍する蛇は、三輪山の神蛇とともに須佐乃男命に退治された八俣大蛇（ヤマタノオロチ）、海神の娘豊玉姫などがあります。



写真11 八俣大蛇

八俣大蛇の場合、大蛇の尾から出現した剣は正真正銘の蛇の精と言われ、書紀に天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）と記され、鏡と並んで皇位象徴の神器になっている事実は、日本古代人における蛇信仰の根強さを証するものではないでしょうか。

鏡も蛇の目にはまぶたが無いいため、まばたきのない目は「光る」ものとして受けとられて畏怖されてきたこと、蛇の古語「カカ」から「蛇（カカ）の目（メ）」－「カカメ」が「カガメ」－「カガミ」に転化して丸くて光る鏡になり、三種の神器の筆頭になたのではないかと考えられています。

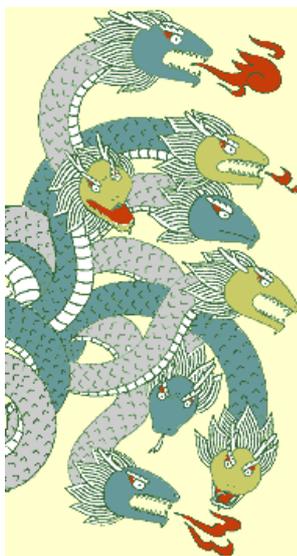


写真12 八俣大蛇

海神の娘、「豊玉姫」は蛇体となって「ウガヤフキアエズノミコト」を産み、その皇子はそのお婆の「玉依姫（タマヨリヒメ）」との間に後の神武天皇をもうけることになります。「豊玉姫」が竜蛇であるならば、その妹の「玉依姫」の正体もまた当然のことながら竜蛇と推測されます。

初代天皇の生母が竜蛇であることは、女祖先神としての蛇を考えている思想のあらわれであって、この神話は天叢雲剣に劣らず、古代日本人の蛇神聖視を示していると言えます。

写真13 大神神社

大神神社（オオミワジンジャ）の拝殿としめ縄時代が下るにつれて蛇はうとましく思はれるようになり、神話の表面から隠されて行きました。



八俣大蛇は悪の象徴とされ、三輪山の神も豊玉姫も、ともにその正体を恋人の前にさらすその瞬間が永遠の別離になっています。

悪徳の象徴とも言うべき大蛇の精髓の剣が天皇の位のしるしとされ、蛇体の豊玉姫、同じように推測されるその妹の玉依姫が、ともに皇室の女祖先となっている事実は、蛇信仰の根深さを後世に実証していると言えます。

写真14 銅鏡

平原遺跡（ヒラバル福岡、糸島）出土の日本最大の鏡日本民族が縄文時代から蛇を信仰していたことは明白な事実ですが、知能が進むにつれ畏敬とは別に強度の嫌悪がふくまれてきましたのは、始めに述べたとおりです。

畏敬と嫌悪の二要素のため、蛇信仰は象徴につぐ象徴として存在し続けることになりました。



写真15 大神神社 大神神社のしめ縄

象徴の中でも際立っているのはしめ縄で、長時間におよぶ雄雌の「蛇の交尾」の造形がしめ縄となり、最も神聖視されて神社の一番目立つところに飾られています。お正月のしめ飾りもその流れにあると言えます。

又お供えの鏡餅は、鏡は蛇の意味であり二段重ねの餅はトグロを巻く蛇の姿であり、上から見れば大小2重の輪であってそれはまさに「蛇の目紋」であると言われ、小餅も蛇の卵の象徴と考えられています。日本人にとって正月のしめ縄と餅は祖霊の象徴としてなくてはならない物になっているといえます。

写真16 大神神社

大神神社（オオミワジンジャ）拝殿（複数の鏡が見られる）神社には蛇の目である鏡が祭られ、しめ縄がはりめぐらされ、家ではお正月になると床の間には祖霊の鏡もちが供えられ戸口にはしめ飾りをして、神社にお参りをするという日本独特の信仰形態が現在もつづいています。



写真17 石見神楽の蛇

吉野氏は「日本人にとって蛇信仰はけっして単純なものでなく、蛇に対する畏敬と嫌悪は「忌み」という言葉で何とか統一しえた宗教感情であり、他方、「象徴化」という行為で克服しえた信仰でもあった。」と明言しています。

「そうしてこの象徴化は、二者の緊張が強ければ強いほど、より高度に芸術化され、洗練されていく傾向を持っていた。その流れが日本文化の底流として現代に続いているのではないのでしょうか。」

引用した文献 「蛇—日本の蛇信仰」 吉野裕子 法政大学出版局